

幾省(狄仁傑)

幾度か 天涯 白雲を 望む

幾度天涯望白雲 今朝歸省見雙親  
春秋雖富朱顏在 歲月無憑白髮新  
美味調羹呈玉筍 佳殺入饌鱸冰鱗  
人生百行無如孝 此志拳拳慕古人

今朝 歸省 双親に 見ゆ

解説 郷に帰り父母に孝養を尽くしたことをうたった詩。

春秋 富むと 雖ども 朱顔 在り

語釈 ※天涯||空の果て。※双親||両親。※朱顔||血色のよい顔。※無慧||あてにな

歲月 憑む 無く 白髮 新たなり

らない。※調羹||羹はすい物の類。調はすい物を調理すること。※呈玉筍||呉の孟宗の母はたけのこが好きであった。そこで冬にたけのこを捜したが見つからず、哀歎したところ、土申からたけのこが生えてきた。※佳殺||ごちそう。※入撰||飲食物を用

美味 羹を 調して 玉筍を 呈し

意すること。※氷鱗||晋の王祥の母は生魚を好んだ。時に氷が張っていたので、それを割ろうとしたところ氷が解けて鯉が飛び出した。※拳拳||恋いしたうさま。

佳殺 饌に 入って 氷鱗を 鱸にす

通釈 何度も空の果てに浮いた白雲を望んで両親を慕ったが、今朝辛いに故郷に帰り、

人生 百行 孝に 如くは 無し

両親に会えたのは、この上もない喜びである。両親は年は取っているけれど血色よく元氣である。だが歲月はあてにならず、白髮が見えるようになった。とにかくおいしい吸い物を料理し、呉の孟宗のように好物のたけのこをさしあげ、またごちそうの仕

此の 志 拳々として 古人を 慕う

度をして、晋の王祥の故事にならない、寒中の鯉をなますにして備えよう。人としての行ないには色々あるが、孝が一番だ。自分も昔の孝子を恋い慕って両親に孝養を尽く

したいものである。